

## 松陰の妹 文と八重の周辺 後編

二七回生 林 裕三

### 前編のあらすじ

前編の小タイトルのみを記し、あらすじに代えさせていただきます。なお、頭の数字は、前編・後編を通じたものとします。

- 一、はじめに
- 二、会津藩士 山本覚馬
- 三、長州藩士 小田村伊之助（楯取素彦）
- 四、長州藩士 吉田松陰 幼少から脱藩まで
- 五、吉田松陰 第2江戸遊学から死罪まで

### 六、長州藩 久坂 玄瑞

長州藩医 久坂量迪の次男玄瑞は1840年(天保11)松陰が10歳のときに生まれる。幼少のときから

討ちを実行した。

1863年(文久3)玄瑞23歳の時 天皇の攘夷祈願の行幸を実現し 玄瑞ら長州藩の裏工作に煽り立てられた朝廷から幕府は攘夷期限を迫られ 5月10日としたのだ。幕府の言質をとった玄瑞の身分は医師から武士になって加増された。勇躍帰国し 下関の光明寺に陣取り、光明寺党を結成し 馬関における攘夷戦の一撃を放ったのだ。この無謀と言える攘夷戦は長州藩の惨敗に終わった。

一方 京では 長州藩が尊攘派公家と結託しているのを面白く思っていない公武合体派の薩摩藩が尊攘派を追い出す計画を会津藩と共に立案し 決行したのだ。堺町御門を守る長州藩兵は入場出来ずやむなく引き上げた。この事件を「八・一八の政変」。「七卿落ち」の名で知られる。この政変を知った長州本国は大変な騒ぎとなり「進発派」の来島又兵衛は今にでも京都を向けて出発しそうだった。藩主は高杉晋作に来島の説得を指示したが 来島は歳の差もあって言うことを聞かず 結局京へ行って久坂玄瑞らと相談しようとう京へ旅立った。高杉晋作が京都に到着すると 国元へ召喚命令、説得の任務を放棄し 脱藩の罪で野山獄に入れられ

藩中でその名は知られていたというから余程優秀だったのだろう。藩校明倫館に入学するも、1853(1854(嘉永6年)7年)にかけて 母 兄 父が次々になくなり15歳にして家督を継ぐ。

1856年(安政3)玄瑞16歳のとき、藩に願出て長崎へ3ヶ月遊学。熊本藩士 宮部鼎蔵を訪ねた際、吉田松陰の名前を知り 松陰との書簡のやり取り1年後1857年(安政4)玄瑞17歳、松陰27歳のとき松陰下村塾に入塾する。松陰は久坂を「防長第一流の人物」と高杉晋作と競わせて 才能を開花させるよう勤めた。1857年(安政4)12月 松陰は自分の妹 文を久坂に嫁がせた。玄瑞18歳、文15歳の時であった。

1858年(安政5)玄瑞 新婚生活も味わうこともなく 江戸と京都に遊学。松陰刑死の後から 玄瑞は松陰の遺志を継ぐかのように長州藩尊攘運動の先頭に立ち 活発に活動するようになる。

同志と共に上京し 長井雅楽の「航海遠路策」によって公武合体論に傾いた藩論を転換すべく尽力し 長井雅楽を失脚させ 自刃させる。

その秋 高杉晋作らと攘夷血盟を行い、御楯組を結成。12月には品川御殿山に建設中の英国公使館焼き

る。松陰が入れられた野山獄、高杉はこう詠った。

「先生を慕ふて ようやく野山獄」

一方 長州の動きが怪しいと見ていた新選組は1864年(文久4) 6月5日三条小橋の池田屋旅館を急襲し二十余名殺害。その中に山本覚馬も江戸で知り合っていた松陰の友達 宮部鼎蔵もいたし、たまたま松下村塾四天王の一人 吉田稔麿が江戸から長州へ帰る途中に宮部を訪ね 誘われて 池田屋事件に巻き込まれた。新撰組局長近藤勇の日記には「長州の吉田稔麿なるものあり、其の死 最も天晴れ、後世学ぶべき」とある。

7月11日 上洛していた佐久間象山が帰宅途中、木屋町で何者かに暗殺される。松陰や会津藩士 山本覚馬など 佐幕派、攘夷派と隔たりなく 指導した象山は散った。覚馬は一番に駆け付ける。

池田屋事件を知った長州はますます憤激し 京に向かつて先発隊2千 援軍後発隊として 世子 定広(元徳)が五卿と共に大軍を率いて上京することになっていた。先発隊が山崎天王山、伏見、八幡と京を包囲するよう陣取って 朝廷に赦免嘆願を繰り返した。幕府側から即日退去を命じられたので長州は八幡の本営で話

し合った。久坂は2千の軍勢では勝ち目はなく世子援軍を待つべきと主張、進発派の来島は「医者坊主に戦争の何が分かる！京へ進むのがイヤなら見物しておれ」と聞く耳持たず。医者坊主と馬鹿呼ばわりされ分別を欠いた久坂はやむなく御所に進軍を指示した。

長州は7月19日禁門に迫って来た。これに対し会津の覚馬らは砲兵隊を率いて参戦する。長州部隊は蛤御門で激しく戦ったものの来島はまもなく戦死し、久坂ら長州軍は塙の高い高司邸に立て籠ったのでやむなく、覚馬は土塀を巨砲で破った。松陰の後を継いだ久坂玄端は大砲により燃える鷹司邸で最早これまでと自刃を決意し、幸い駆け付けた入江九一に世子への伝令役を依頼し、安心して24歳で歿した。妻文とは夫婦らしい生活を殆どしていなかった玄端は妻に詫びながら亡くなったのだろう。また、京都の芸者が玄端の子供を身ごもっていたことを知っていたのだろうか。

一方入江は屋敷を出たときに槍で突かれた。松陰晩年、塾生殆ど松陰の言動に批判的だったときに只一人師に従って行動しようとした入江九一は27歳で歿す。  
(蛤御門の変・禁門の変)

のため立ち上がった。自分が創設した奇兵隊も動くようとしなかった。やつと伊藤俊輔が力士隊を引き連れて高杉の後を追った。三田尻の海軍局襲撃に成功したことにより奇兵隊も参戦し三千人部隊となった。ついに1865年(元治2)2月、正義派が政庁を奪回した。

政権が変わった長州は幕府の指示を無視するようになり、幕府は將軍徳川家持が全軍を指揮する第2次長州征討軍組織した。長州はまたもや危機に陥った。長州は不思議なもので、行方不明であった桂小五郎が姿を現したのである。坂本竜馬が薩長同盟を働き掛け対応した桂は「軍艦と洋式銃1300挺を薩摩藩で購入の周旋せられたし」と条件を付け、坂本は了解し要求通り、長州に引き渡した。薩摩の誠意を感じた桂は1866年(慶応2)1月、二本松の薩摩藩邸(現同志社今出川キャンパス)で打ち合わせるもメンツの問題で合意せず、やつと1月21日になって、幕府に対する軍事同盟が結ばれた。

第2次長州征伐は前年の5月に発令されているにもかかわらず、諸藩台所事情で積極的でなく、幕府は長州に妥協案も示したが、長州は薩長同盟が成立し、かつ軍備増強もしたこともあり、妥協案を拒否、1866年

## 七、久坂 没後

敗残の兵が命からがら本国についた頃、米英仏蘭の四国連合体が攻撃を仕掛けてきたのだ。

1864年(元治1)8月5日、関門海峡した四力国の合計17隻の軍艦の砲撃を受けると、二日間降伏、この事態を救ったのが、野山獄に入れられていた高杉晋作、早速、講和談判に伊藤俊輔を従え乗り込む。四力国側は賠償金3百万ドルを要求してきたが、「攘夷は幕府の命令でやむなくやった」と晋作固く拒否し、請求先を変えさせて談判は終了した。これまで攘夷を旗頭にしてきた長州も自ら講和談判を成立させたことにより藩としての攘夷行動は終る。

1864年(元治1)8月22日禁門の変の罪で第一次長州征伐が決まっております。藩主・世子の官位を剥奪し、家老職3人の切腹他で幕府軍は引き上げた。その頃長州藩内では倒幕派の「正義派」と「俗論派」が争っており、「正義派」の敗退により、「俗論派」が勢力を盛り返していた。松下村塾生を支えて来た「正義派」の大部の周布政之進は政情に絶望し自宅で自刃した。

命の危険を感じ、隠れていた高杉晋作は、藩政府が幕府に妥協したことに不満を持ち、俗論派藩政府打倒

(慶応2)6月、幕府軍の軍艦が周防大島を砲撃し戦争の火蓋が切られた。高杉は購入したばかりの軍艦丙虎丸に乗り酒樽を開けて兵士に飲ませながら指揮して相手を撃退した。そんな中、將軍家持が大坂城で病死したので、停戦となり、1867年(慶応3)1月二次に渡る長州征伐は終了した。前年の夏より戦線を離脱していた高杉は下関葉山他で療養していた。辞世と言われている歌がある。下の句は野村望東尼の作と言われている。

面白き事なき世におもしろく

住みなすものは心なりけり  
『しつかりやって呉れる』と言うのが遺言といえは遺言です」と妻、政が言うほど、見舞客に言い続けているのだろう。その年の4月に28歳で亡くなった。

1867年(慶応3)10月14日將軍になった徳川慶喜は大政奉還の上表を提出した。今後のことは諸侯会議にて決すると言うことなので慶喜の権力の維持が出来ると考えたのだ。それを嫌った倒幕派は12月9日王政復古の偽勅に近い密勅を出させた。元々尊王的な考え方をする水戸出身の慶喜は、戦意を喪失し江戸に帰還する。このことにより、流れは完全に討幕軍優勢となつて、戊辰戦争を経て明治の世が開ける。偽勅と

岩倉具視が学者の玉松操に図案化させ長州の品川弥二郎が製作した錦旗が絶大な効果を挙げる。

「功詐を以て、過ちを文(かざ)るを、恥と為す」の考えの松陰が知ったらどう思うだろうか

明治政府に出仕した松下村塾の塾生は伊藤博文、山形有朋、品川弥二郎、前原一誠、野村靖之助らである。松陰の教え子であったが塾生でない木戸孝允がいた。

また、前原一誠は師松陰から「その人物の完全なることは、高杉、久坂も遠く及ばない」と評された程であり、また久坂没後、晋作と協力し幕府の第2次長州征伐軍を打負かし、晋作没後リーダー的存在で兵部大輔でもあったが木戸孝允とは馬が合わなかった。辞任後特に、廃刀令布告後不平土族の中心人物となった。

長州と戦った会津藩の家老の弟、山川健次郎の米留学を斡旋した長州藩士奥平謙輔もその仲間であった。

斗南藩(旧会津藩)の小参事まで勤めた永岡久茂は反政府系の「評論新聞社」を創立し奥平と連絡を取り合っていた。元家老の山川浩も支援していたが、行動を共にするまでは至らなかった。萩で前原、奥平が挙兵した時、永岡ら約14名は思案橋から船で千葉方面へ出発した。このとき警察に取り押さえられた。(思案橋事件)

まれて三女の艶が亡くなっているが省略する) 文は直ぐ寝付くし育てやすい子であった。

叔父の玉木文之進は自宅に松下村塾を開いた。その後松陰が自宅にて幽囚となり、松下村塾を引き継いで講義をはじめ。塾生たちの世話を文が担当することになる。玄瑞が松陰と討論しにやってくるのでその都度応対していると互いに興味を持ったのか松陰から文に久坂との縁談を勧め「肝心なことは貞婦は二夫にまじえず」等と婦道について書き物を与えた。結婚後は杉家で同居することになったが玄瑞は年明け二月の終わりに江戸・京都遊学に旅立った。玄瑞は藩に帰って来ても自宅に戻ることは少なかった。幸い京都や江戸へ旅たつ者が多いので手紙や着替えを託けたりはしている。手紙の中で面白いのは武士の妻なら歌を勉強しろ。何処々々の奥方は歌が上手いとか、今の奥さんなら立腹するようなことを書き送っている。でも、文は素直に和歌を付け加え玄瑞の指示に従っている。1863年(文久3)8月18日所謂「七卿落ち」に随伴した玄瑞は文に京都の街は長州人には取締りが厳しくなっていく死ぬかもしれないと考えたのか「義兄小田村伊之助氏の次男久米二郎を久坂の養子と

なお萩の乱は松下村塾に悲劇を呼んだ。松陰の叔父の玉木文之進が再び開いていた松下村塾の何人もの門人が前原の反乱軍に参加していた。松陰の兄梅太郎(後の民治)も伊之助の忠告を聞かず肩入れしていたので中央官庁への任官も山口県職員も免職となる。叔父文之進も密かに反乱軍を応援していたから、前原が捕らえられ破れたと知ったときは深く先祖の墓の前で自刃した。当然木戸孝允は首謀者を斬首とした。このように不平土族の反乱は1874年(明治6)の佐賀の乱から始まって熊本の新風連の乱、福岡の秋月の乱、この萩の乱そして1877年(明治10)の最大で最後の西南政争でもって終わり明治維新は画期を迎えた。

## 八、杉文

1843年(天保14)に松陰と同じく松本村団子岩で生まれる。父の百合之助はその時百人中間頭兼盗賊改方と言う今で言うなら警察署長のような立場であった。上の兄は梅太郎、下の兄は松陰。上の姉が千代、下の姉が寿の一番下の女の子として生まれた。(文が生

したい)旨告げる。姉寿の子でもある。その後の手紙には京都にいる玄瑞の元へ義兄梅太郎が長男小太郎と連れて来た久米次郎と一緒に寝たとか久米次郎の大小を大阪に注文したとか言う微笑ましい手紙を文に送っている。久坂は世子毛利元徳を上京させ朝廷に赦免を要請すれば今なら許されると藩を口説きますます忙しくなる。文と久米二郎と川の字になって寝たのは僅かの日だった。玄瑞の項で記したように会津藩山本覚馬の砲弾(蛤御門の変)により亡くなる。文は21歳であった。松陰の妹、久坂玄瑞の妻として強く生きなければならぬと決意した文は美和と名前を変えて、毛利家の奥御殿で働くことになった。明治になって玄瑞が京都の女に産ませた秀次郎が現れ、確かなようなので久坂玄瑞の跡取りとし、養子の久米次郎は楯取(小田村)姓に復籍させた。

萩の乱が収まった頃、姉寿の様態が悪くなり文は群馬県令(今の知事)であった義兄楯取素彦(小田村伊之助)を手助けするために時々前橋へ看病に行っていた。1881年(明治14)看護虚しく寿は43歳で亡くなる。県令として忙しく働く素彦を杉家として放置する訳にはいかず、母滝は文に後添えとなるよう

勧める。文は松陰と「二夫に交えず」と約束したと受け付けない。でも母滝は「松陰はこの母の言うことを聞かなかったことはなかった。あの野山塾で絶食したとき母の言う事だけは聞いて絶食を止めてくれた。松陰はこの再婚は賛成してくれるはず。」と迫った。

1888年(明治15) 美和は義兄 楫取素彦と再婚する。美和は玄瑞との手紙を整理出来ず 素彦に見せる。素彦は美和(文)の思いを汲み取り 玄瑞から美和に送った手紙を「涙袖帳」と銘打った巻物にまとめた。これを読むと 玄瑞は口では「女が男の政ごとに口出すな」と文に言っていたが 少しでも武士の妻として修養を積み 故事についても書き送っている。戊辰戦争の折 覚馬の妹 川崎八重(山本八重)が夫 川崎尚之助と一緒に鶴ヶ城の籠城戦を戦ったのと同様 二人してこの国難を乗り越えようと言う姿勢が伺える。

1921年(大正10) 美和死去 78歳

### 九. 新島 七五三太(新島襄)

新島七五三太は父 藩の祐筆民治と母とみの嫡男として安中藩江戸屋敷(現神田学士会館・七五三太公園と

命名予定)にて1843年(天保14)に生まれる。

十三歳から蘭学を学び 1860年(万延1) 江戸湾に現れたオランダ軍艦に驚き、前後して築地の軍艦教授所に通う。安中藩の宗家に当たれる備中松山藩の洋式帆船「快風丸」に乗る機会に恵まれ備中玉島まで往復航海する。玉島から帰って来た年に蘭学の他に英語も必要と考え、友人から本を借りるようになった。その中にロビンソン・クルーソーの翻訳ものがあり、彼は記述する「その本により外国を訪ねてみたいと言う願望にかき立てられた。私はその本をたいそう気に入ったので、祖父にそれを見せ、是非読んで欲しいと強く勧めた。それを一読すると『七五三太よ、こんな本を読んではならない。お前の道を誤らせはしないか心配だからだ』と」それ以降も 漢文の聖書や連邦志略なども借りている。その頃の青年武士は米国の大統領制や中国がアヘン戦争に負けて大変なことになっていると言うことを知っていたのだ。面白いことに、松陰は新島の前藩主 板倉勝明について「安中候 賢にして文学を好む」と記述している。勝明は水戸の徳川斉昭らと交流していたためか尊攘派の志士に人気があったと思える。それにしても 藩主が面白いと読んでいたロビン

ソン・クルーソーを新島の祖父が危険な本だと断定したのも面白い。晋作の父忠太が松下村塾への入塾を反対したのも同じ理由だ。外国への興味は偶然にも1864年(元治元年) 四月、備中松山藩の玉島へ行った「快風丸」が箱館へ行くことを知り、乗船する幸運として具現化する。箱館で良き同士に巡り会い彼の脱国に協力する。中でも英国商社ポーター商会の店員富士屋卯之吉が全てを用意してくれ 細心の注意を払い 沖に停泊するベルリン号まで小舟に乗せてくれ 脱国に成功する。新島は松陰の失敗は知っていたであろうがその記述は見当たらない。松陰の行動は余りにも行き当たりばったりで計画らしきものはない。英語の横文字を蟹文と馬鹿にしていて習得もしていない。一方新島は先に述べたように オランダ軍艦を見た後 航海術や英語の勉強を始めている。その結果 ポストン到着後に養父となった船主ハーディーから求められ 2年間の英語力で渾身の力でまとめ提出した「脱国理由書」に心打たれ その書類こそが新島の将来を決定したのだ。松陰の一番大きな誤りは 開国を迫る正式艦隊に乗船を要求するのだから無理がある。それと新島の場合、箱館と言う幕府の目が届き難い開港間もない港であっ

たのが成功した理由の一つでもある。小舟でもベルリン号でも一応検査に来ているが隠れて逃れているのだ。とても「至誠にして動かざる者は、未だ之れ有らざる也」とか「功詐を以て 過ちを文(かぎ)るを 恥と為す」では成功しない。いづれにしる新島は1年後ポストンに着き、約10年間米国で勉強して宣教師として帰国する。山本覚馬や岩倉使節団との活動で知り合った政府要人及び米国友人の協力を得て 1875年(明治11) 11月29日 覚馬が幽閉されていた薩摩藩邸跡地を購入し 同志社英学校を創立する。1890年(明治23) 1月23日 大学設立募金運動途中 46歳11ヶ月の若さで急ぎ過ぎたがゆえに大磯にて 駆けつけ 妻 八重の膝元で歿する。

### 十. 山本 八重(新島 八重)

山本八重は1845年(弘化2) 12月1日、会津藩で代々砲術師範を務める山本権八と佐久の三女として鶴ヶ城の近くに生まれる。藩の砲術師範でもあった十七歳上の尊敬する兄の覚馬から射撃や砲術を学んだ八重は隣の伊東家の子供にも砲術を指南する。

兄覚馬と江戸で学んだ出石藩 洋学者 川崎正之助  
が1857年(安政4)覚馬の要請により 山本家の居  
候となり 藩校日新館の蘭字所の教授を務めながら砲  
術の研究もしていた。八重の九歳上ということもあつ  
て心安く砲術なども教えてもらっていた。京都にいた  
兄覚馬からの勧めもあつて 仲良く鉄砲の改良に従事  
していた八重と尚之助(正之助から改名)は結婚した。

鳥羽伏見の戦いで破れた会津藩は幕府にも見捨て  
られ1867年(明治元年)8月 前藩主松平容保のも  
と鶴ヶ城で籠城することになった。八重は兄からもら  
ったか 正之助の結納であつた会津藩にはなかつた7  
連発スパーサー銃を持って大活躍した。

容保が敵陣から砲弾の構造を問われると 八重が着  
発しないよう砲弾を抱え、これを(御前で)分解し、  
数多の鉄片を取り出し流暢に説明し四座を驚かした。

籠城中の話は前号に詳しいが八重の夫 尚之助の小  
田山への大砲の見事な命中が最後の攻撃となり この  
一週間後、1867年(明治1)9月22日会津藩は  
降伏した。尚之助とは離れ離れになり消息が絶たれた。  
亡くなったと思っていた兄覚馬から京都へ来るよ  
うにとの手紙が届き、1871年(明治4)10月皆京

都へ行く。

1875年(明治8)3月の尚之助の死亡通知が覚馬  
に来て 八重はどのように思っただろうか。尚之助は斗  
南藩の窮状を救うために苦境と戦い、八重と斗南藩を  
守るためそのまま黙して昇華した。(実際 尚之助は多  
くの届書を作成してるが いずれも独身で通している)

1876年(明治9)1月 八重は兄覚馬の勧め  
米国から10年ぶりに帰って来た新島襄と結婚し、多  
くの困難と闘い同志社の学校設立に協力する。

山本八重として新政府軍だけでなく会津の男中心  
の考え方と戦った八重は、京都に来て兄に言われるま  
ま再婚し 新島襄と一緒に新島八重として、当時  
はまだ四面楚歌とも言うべき境遇にあつた基督教に身  
を投じ女丈夫として生き抜いたのだ。このことは玄瑞  
と素彦の二人の夫とともに暮らし 夫々と精一杯頑張  
りぬき 兄松陰を尊敬していた文にも言える。

文(美和)は1921年(大正10)78歳で亡くな  
り 八重は1932年(昭和7)87歳で亡くなった。

(完)